

木曾川



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
今回は河畔砂丘が広がる祖父江町から、開墾と治水事業を中心に、
伊勢湾台風シリーズ第六編では、木曾三川高潮対策事業を特集します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《祖父江町》

木曾川左岸に広がる祖父江町は、豊かな穀倉地帯

AREA REPORT

治水事業の軌跡を語る、佐屋川と領内川

気ままにJOURNEY

人と光と風の町、祖父江。

歴史ドキュメント

濃尾平野の地盤沈下と木曾三川高潮対策事業

TALK&TALK

「危険が迫っている」情報をいかに伝えたか

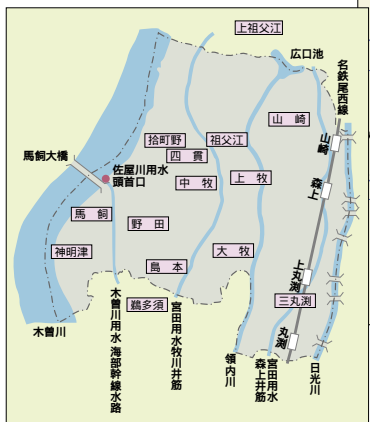
民話の小箱

祖父江の竿鷹

木曾川左岸に広がる祖父江町は 豊かな穀倉地帯



昭和40年代の祖父江町空撮



祖父江町の地形図

美しい景観を誇る祖父江砂丘
濃尾平野のほぼ中央、木曾川左岸に開けた愛知県祖父江町は、全国でも有数のギンシンの産地です。中央部には領内川が流れ、それに平行するように、木曾川、日光川が南流しています。町の標高は1〜3m。木曾川河口から約30km北上しているのは、白砂丘と松原は美しい景観をかもしだしています。



松林と砂丘

木曾七流とも木曾八流とも呼ばれた木曾川は、古来より幾度も河の流れを変えてきた氾濫源。その一方、木曾川の堆積土砂は肥沃な土地を熟成し、豊富な水源は、田畑や水運を支えてきました。町内を木曾川の本流、支流が走る祖父江町もまた、河川とともに歴史を重ねてきた町。沼地を開墾し、用水を整備しながら、中部地方でも有数の穀倉地帯に成長しました。現在、だれもが心豊かに住み、働き、憩う・緑映える町の実現に向けて、さまざまなプロジェクトが実施されています。

す。この河岸砂丘は利根川と並び日本でも有数のスケール。古来から木曾川の本支流が押し出す堆積土砂により形成されました。

現在、祖父江町を南流する河川は木曾川をはじめとする三川ですが、また木曾川が木曾七流とも八流との呼ばれた時代。この地には佐屋川や加賀野井川、萩原川など、木曾川や長良川を本流とする幾筋もの小河川が乱流。幾度も洪水や氾濫による河川の変動により、現在のよつな肥沃な土地が熟成されました。祖父江といっつ名は過去の河川の状況を伝えるもの。また木曾川に堤防がなかった頃、潮の干満のたひに加賀野井川では赤褐色の、そぶ水がよごんだことから、そぶ水にちなみ祖父江と名づけられました。

氾濫する沼沢も牧畜の好適地

祖父江の地が始めて開発されたのは、弥生後期の遺跡がみられる三世紀末頃。六〜七世紀の古墳時代遺跡は、日光川、領内川の流域に点在。祖父江がその方面から開発されてきたことを物語っています。

弥生時代には比較的稳定していた木曾川も古墳時代末期から鎌倉時代にかけて氾濫を繰り返す。この頃から主要流路が今日の河道付近へ移動。この影響をまもりに受け、祖父江一帯は、村の三分の一がそぶ水のまま沼地だったといわれています。

このような沼地は、牧草が生い茂る牧畜の好適地。旧加賀野井川、佐屋川に囲まれた鳥形の地形をなしている馬飼は文字通り牧場に最適だったでしょう。上牧、中牧、大牧の地名の示すように牧場地帯であったと思われ

瀨 祖父江の三家に分かれますが、祖父江横井家は五代目の時久以来、「祖父江の殿様」といわれました。同氏は関ヶ原の合戦後、徳川家康の命により尾張藩主義直に属し、鉄砲頭や鷹匠を歴任しています。

実りの地祖父江を育んだ御囲堤
肥沃な農業地帯の始まり。それは慶長二三年（一六〇八）から始まる大築堤工事、いわゆる「御囲堤」の築造です。氾濫の度に流路を変動させていた木曾川は、天正一四年（一五八六）の大洪水以降、現在の本流に移動。この本流をさらに固定化させたのが御囲堤の築堤工事でした。

御囲堤の築堤にあたり、木曾七流と呼ばれた分流通は締切られて本流の水量は豊かになり、大規模用水の水源河川に。これにより祖父江は洪水に悩まされることがなく、しかも用水にも恵まれて、次々と新田を開墾。一七世紀から一九世紀にかけて、下祖父江古川、神明津、馬飼など幕末までに七四の新田が開墾されました。祖父江一帯は江戸期を通じて尾張藩領に属し、その大半が鶴多須代官所の管轄下に置かれました。

木曾川を管理した神明津番所

御囲堤の築造は祖父江に豊かな実りをもたらしましたが、その反面、分流通の締切はこれら用水路や排水路として利用していた集落主に美濃側を困窮させる原因に。こうした弊害を背景としながらも、断行した理由には、当時大坂城にあった豊臣方に対する防衛線であり、尾張平野を洪水から守るためともいわれていますが、経済的には当時大量に伐採し木曾川を流送した木曾檜の輸送を確保するためでした。江戸城、駿府城、名古屋城等の各地の城や大名屋敷の建築マシが始めた江戸初期、木曾川の流送をマシで行ったため、湯水期に障害にならないように分流通を



鶴多須代官所跡

明治二年の市町村制の実施に伴い、祖父江村が誕生。以後、変遷を繰り返しながら、昭和三年には現在の祖父江町が確定しました。

市町村制が実施された明治二年には、東海道本線が開通。明治三二年には尾西鉄道が津島、弥富間を結び、翌年には津島、萩原間が開通。祖父江にも森上駅が誕生しました。鉄道網の整備は祖父江町の発展にも寄与。特産である植木や苗木は森上駅から全国に出荷されました。



明治33年 森上駅と機関車

川が重要な交通網であった時代。渡船場各地の産業や文化が交流する大切な場所だったのでしよう。八神渡は昭和の時代まで利用されていましたが、昭和五年の馬飼大橋の完成により廃止されました。

大規模な国土開発で緑豊かな町に



八神の渡し

神明津番所が置かれた神明津村は、伊勢と美濃路を結ぶ渡船場だった。他にも八神渡、野田渡などの渡船場があり、尾張や美濃国を結んでいました。尾張藩が木曾谷を支配していた江戸期、木曾材の運送管理の厳しさは、木一本首つという言葉が残されるほど。木曾川の氾濫で木曾材が盗まれたり隠されることのないよう、厳しく詮議しています。木曾沿岸に暮らす庶民が家を建てたり、修理をしたり、橋や水門の工事をしたりするとき、その材木をどこで手に入れたかを届け、検査を受けるといっ御法度も、こつした管理の厳しさを伝えています。



佐屋川用水取水口

交通網の整備と平行して大規模な治水事業や土地改良も実施されました。明治九年の暴風雨を契機に、佐屋川用水が成立し、昭和一年には佐屋川耕地整理事業が完成。昭和四四年には土地改良事業に着手。ほ場の土地基盤整理や道路や用水路・排水路を整備。農業の近代化を促進させました。祖父江が、イチョウの茂る町といわれるのもこつした国土開発を背景としているからでしょう。

昭和五二年には愛知県と岐阜県を結ぶ馬飼大橋が木曾川に架橋され、流通面の大動脈が生まれました。木曾川左岸の祖父江砂丘は、国営木曾三公園ワイルドネイチャープラザとして平成八年度開園され、水上スポーツや自然と触れあいたい体験する場として、若者たちの人気を集めています。



馬飼大橋（馬飼頭首工）

木曾川の清流とともに歩み、その恩恵を受けながら歴史を重ねた祖父江。この町では現在、だれもが心豊かに住み、働き、憩う・緑映える町の実現に向けて、さまざまなプロジェクトが実施されています。

- 参考文献
- 『祖父江町史』祖父江町
 - 『新編宮田用水史』宮田川土地改良区
 - 『町制100周年記念祖父江町勢要覧』祖父江町
 - 『領内川史』領内川史編纂委員会
 - 『新編愛知県偉人伝』愛知県郷土資料刊行会
 - 『愛知県地名大事典』角川書店

ふるさとの街・探訪記

折からの中世武家社会は騎馬戦の時代。馬は重要な戦力源であり、農民にとっても田畑を開墾する重要な労働力でした。

大規模開墾は土豪たちの手で

祖父江が豊かに実る穀倉地帯となったのは近世初頭からですが、氾濫に悩まされる一方で水利の便のよいこの地は、鎌倉時代から所領獲得に狂奔する土豪にこつ注目の的でした。最初に祖父江に着目し開墾に成功したのは、中世尾張の土豪として知られる中島氏。尾張国大介として国府にホストをもつ中島氏は職権を利用し開発許可を得て、開発団を結成。灌漑用水の整備、堤防の築造、排水工事などにより自領を増加し、知多の荒尾氏らに尾張第一の土豪に成長したのが室町時代中期のことでした。

中島・荒尾を頂点とした尾張の土豪たちも室町幕府の勢力の衰退にともなう壊滅してきました。しかし、戦国時代の濃尾平野にはどの勢力にも属さない野武士や地侍が広く散在。これらを組織化し強力な家臣団を編成したのが織田信長であり、後の豊臣秀吉でした。こつした下剋上の世に、中島氏に代わって祖父江を領有したのは、祖父江氏でした。同氏は織田信長に仕え、長島の一向一揆の鎮圧や旧萩原川の治水工事に力を尽くしたと伝えられています。

その一方、横井氏は室町時代末期から尾張西部を領有した国人で、織田・豊臣・徳川と政権が交代しても、依然としてその地を領有した在地領主でした。横井氏は後に赤目、藤々れいいます。

横井家の人々と佐藤牧山

祖父江の横井家は尾張藩の給人で、学者、文化人を輩出した名門です。横井時庸は、江戸中期、尾張風土記の編纂奉行を務めました。その孫、横井千秋は本居宣長に師事し、古事記伝の出版に私財を投じて貢献しています。著書『八尺白玉考』は宣長の絶賛を受けています。また、横井時冬は、日本商業史を著したほか、能楽、茶道にも優れていました。

佐藤牧山は祖父江町が生んだ偉大な儒学者であり教育者。明治の元勳伊藤博文に老子を講じたほどの逸材です。九歳の折りに林太学頭の弟子となり昌平校に学び、江戸で塾を開きました。明治元年には帰郷。明治三年には尾張藩の明倫堂督学に就任しますが、翌年の廃藩置県に伴い明倫堂も廃校。自ら朝日塾を起しますが、数百人の塾生が聴講するほどのにぎわい。牧山の名を天下に知らしめることになりました。文部省は積年の教育の労をねぎらい賞状を授け、晩年は再び東京に戻り塾の講師に、多くの名士が来訪し、教育や学問に大きく貢献しています。

著書は『老子講』や『東海紀行』など。終生、貧苦と戦い、不遇を克服し、生涯を学問と教育に捧げました。



佐藤牧山碑 佐藤牧山老子講義原本と版木

ふるさとの街・探訪記

治水事業の軌跡を語る、佐屋川と領内川

佐屋川と領内川は、祖父江町一帯の重要な河川。用水や排水、または舟運の水路として、人々の暮らしを支えてきました。しかし、木曾川が押し出す土砂は、これらの川を埋めてしまつた勢。氾濫し、灌漑にも大きな支障を与えてきました。

木曾川左岸に広がる祖父江の歴史もまた、治水や利水事業の繰り返しだったといえます。明治期、ついに佐屋川は廃川。領内川は整備され、今もお重要な水源です。木曾川から独立した「の河川」の変貌は、治水事業の軌跡を物語っています。

江戸以前の治水政策

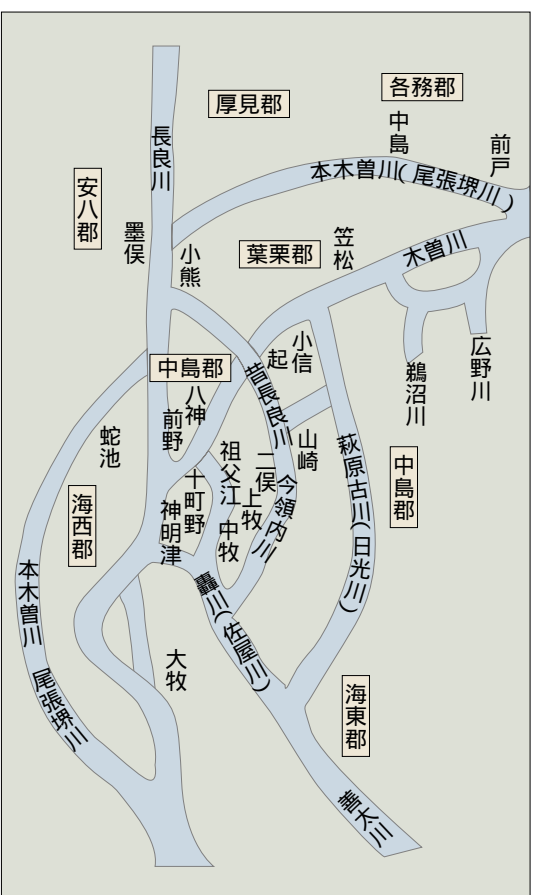
暴れ狂つた水を治め、美りを結ぶ。この普遍的なテーマは、どの時代も同じ。戦国時代、大軍を従えて各地を転戦する武将にとって、道路や橋梁の整備はもちろんだこと。戦いの糧である兵糧米の収穫のため、用水や治水を急いだのも当然の帰結といえるでしょう。

信玄堤を代表とする武田信玄の治水政策はあまりにも有名ですが、「濃尾平野の雄織田信長もまた、治水や用水の確保には腐心し

ていたと評する。祖父江の豪族、祖父江五郎右衛門や坂井文助は、織田信長やその子信雄の命を受け、それぞれ築堤奉行として、築堤ばかりでなく、橋梁のことも尽力した人物です。坂井古文書によれば、天正二年（一五七四）信長は、「川水が停滞



坂井文助の旧蹟



近世の祖父江町一帯の河川の状況（『領内川史』より）

せぬよう、江ざらえ、川ざらえ、浚渫を怠りなく申しつけよ、もし怠る村があらば、その理由をきいて、事次第によっては処罰する」というような厳命を下しています。また天正三年には、秋原川（現在の日光川）の堤防の修築を急がせており、怠れば成敗すると、きつく命令しています。

殿様の厳命でもなかなか実行されなかったのは、庶民が貧しく生活に余裕がなかったからで、当時の農民がどんなに苦しんでいたか、思いやられます。

全国統一を果たさないまま横死した織田信長の後を引き継いだ豊田秀吉は、天正二年（一五八四）、美濃国と尾張間の堤防を修築させました。

その後、天正一四年（一五八六）の大洪水は、木曾川本流を大移動させました。前年に発生したマグニチュード8.2の大地震による被害との相乗的作用で被害をさらに大きくしたとも考えられています。

この地震と洪水により大被害を受けた尾張平野は復旧も充分に行われることなく放置されていたと、文禄初年（一五九二）、ようやく関白秀次は尾張国の堤防を補強。翌年に秀吉は尾張国の木曾川堤をはじめ、諸川堤を修築しています。

天正一四年の洪水によつてできた新木曾川の堤防は、この時にはじめて本格的に築かれたと、命令書によれば、尾張一國から広く人足を集めるほど大規模な工事であったと思われる。ちなみに、陰陽師といわれる祈禱師まで動員されており、その決意の程がうかがわれます。

しかし文禄四年に再び大洪水があり、再度修復。豊田秀吉は統一政権として、大規模な治水政策を実施しており、それは江戸期における御手



佐屋川の猿尾神明津村



木曾川の猿尾中牧村

伝書請いいわゆる公的な役割を示していました。戦乱の世が終息した桃山時代、権力の手によつて、やつと大規模な治水事業が実施される土壌が整備されたのでした。

放水路として機能した佐屋川

天正一四の大洪水の後、木曾川を現在の流路に固定化させたのが、慶長一三年（一六〇八）から開始された御園堤の築堤でした。濃尾平野を幾層にも分かれて流下していた木曾川派川はすべて締切られ、これを用水路や排水路に利用していた水田の混乱を招くことになりました。

佐屋川は、木曾川の第一の派川でした。正保三年（一六四二）に開削されて、木曾川の放水路的な性格をもつ人工河川となりました。

開削後の流路は、祖父江の上流部で木曾川と分水し、木曾川と揖斐川が合流する油島（現在の岐阜県海津町）より下流の五明輪中現在の愛知県

弥富町で再び合流。佐屋川と桑名を結ぶ三里の渡しこの水路としても重要な役割を果たしていました。

一つした木曾川から分水により、洪水時の水に混じった多量の土砂が佐屋川に沈積するようになり、河床の上昇を招くこと。放水路としても機能に支障をきたすようになりま

宝暦三年（一七五三）には、宝暦治水の引き金ともなる大洪水が発生。幕府は木曾三川普請計画として、木曾川は以前は佐屋川へ分流していたが、近年佐屋川が埋まり、また寄洲などで水行に支障をきたしている。したがって水流を促すために猿尾を設け、浚渫などを行い、木曾川本流の水を佐屋川へ四割ほど流し、また流末である各派川なども浚渫し、それらの諸川へ分流する必要があるとしています。

明治時代、木曾三川を分流したオランダ人技師、ユルネステレーケも、明治一一年ごろには、木曾川分流意見の上申において、佐屋川の放水路機能を評価する意見を残しています。このように、佐屋川の河床を低下させる工事は再三行われましたが、いずれも効果をみることはできませんでした。

そして、明治一九年の大洪水で佐屋川は氾濫。これを契機に明治三年に、佐屋川は分派口と合流口において締切られ、ついに廃川となりました。代わつて、佐屋川用水が整備されました。

宝暦治水（一七五四～一七五五）薩摩藩による御手伝普請。木曾三川分流をめざして実施された。近世史上まれにみる難事業。

領内川の治水の足跡

《その名の由来》

現在の祖父江町のほぼ中央を南流するのが領内川です。かつての文献は、「の川を境として西の方は横井氏の所領なるゆえに「の」名あり」と伝えてきます。これにしたがえば、領内川の名の始まりは、尾張国有数の豪族横井氏が、尾張藩主より「の地」に封ぜられた慶長年間（一六世紀末期～一七世紀初頭）以後のことです。



領内川開削の碑

れ以前はなんと呼ばれていたか不明です。しかし部分的な通称として、北部では阿古井川、祐久川、広口川、祖父江川とか、中部では一俣川、甲川、南部では西川、鷹場川などと呼ばれ、明治、大正のころまで、この名が使われていました。

ちなみに、先述した佐屋川も、北部では野田川、轟川、南部では佐屋川と呼ばれていました。轟川とは、水声のどどどとした様から名づけられたといえます。このように、川は地域の名称やその様子にちなんで呼ばれていたとみられます。

《領内川の誕生》
天正一四年の大洪水以前の領内川は、長良川から分派していたとみられます。かつての領内川は鷹場、現在の祖父江町南部の集落で木曾川の派川、佐屋川に合流していたと思われま

す。それが、天正の洪水による美濃・尾張の河川の大変遷で、長良川からも木曾川からも断ち切られ、今のように独立した領内川が誕生したと考えられています。

領内川に長良川の水が流れこんでいた証拠らしいことは、領内川沿いの土壌に鉄分が多いこと、奥美濃から流れ出る長良川の流れには金気が含まれていますが、信濃から流れ出す木曾川の流域には、地下水にもこの成分がみられませんが、領内川と長良川との関係については、こんなことも一考に値すると思われま

す。《新水路の開削》
木曾川から流れ出す多量の土砂は、流勢のゆるやかな下流になると、盛んに沈殿をはじ

め、特に水勢のほゞまれの屈曲部では冬期の水枯れや伊吹おろしの強風が重なって、砂州や砂山を作りまし

た。領内川沿いに残された地名、松山、角山、川原などは、当時の砂山の状況を伝える証です。このため、派川の入口が閉塞して廃川になったり、湛水池になったりしました。領内川も「つた例にもれず、次第に下流の氾濫に悩まされるようになりまし

た。加藤重兵衛は、佐屋川への流入地点を掘り広めて同所に放水門を設けました。しかし、流入地点の河床はその後も上昇、排水不良を引き起すので、享保二年（一七二七）、領内川新水路を佐屋川に沿って開削しました。しかし、せりかく新水路を開削し排水を良くした領内川も、他の木曾川派川の大改修の影響を受け、再び洪水被害を受けるようになりまし

た。そこで、横井家の重臣、岩田和兵衛守和は、新水路の開削を思い立ち、地勢を調査、周辺村落の人々を説得し、同意を得て官布に願い出

ています。天明七年（一七八七）、やつと奉行の許可を得た守和は翌年から工事に着手。七

領内川に生涯を捧げた 山中勲治郎

山中勲治郎は明治五年、祖父江町に生まれました。若い頃から政治を志し、祖父江町長、愛知県議員などを経て、政治に明け暮れていた当時、一方の旗頭として采配を振る、激しい気性、強烈な個性で自分の信じる方向へ、人々をダイケイ引つ張っていました。こういふ硬骨の人は、愛すべき面も持ち合わせているもので、彼はその例にもれず、ヤマカキさんの愛称で親しまれていました。

昭和一〇年代の領内川は堤防もなく、毎年のように水害を被っていました。当時、祖父江町長たち「ヤマカキさんは、農家を救済するには水利組合を設立するの

が急務である」と考え、調査を開始。利害関係が反する関係者たちを説得し、昭和一七年ついに領内川用水普通水利組合を創始するまで「つたけました。

当時の愛知県職員は、私が県庁に就職したばかりのころ、県庁でとなり散らして「田んぼ」ひけのあじいさんがいた。後

領内川、昭和32年下流より堂前橋を望む

で聞いたら、あれが有名なヤマカキさんだと分かったと語っています。老いてなお、自分の信じる道を突き進むヤマカキさんのマインドです。この情熱をもつて、近代領内川史の幕は開かれたのでした。

晩年には愛妻に先立たれ、小学校の校長をしていた令息も失い、失意の中にありましたが、若し頃の不屈の精神は少しも衰えず、昭和二十七年の夏に亡くなるその日まで、領内川のことが頭から去らなかつたと伝えられています。

《参考文献》
『領内川史』領内川史編纂委員会
『祖父江町史』祖父江町
『木曾三川流域誌』建設省
『新編宮田用水史』宮田用水土地改良区
『木曾川用水史』水資源開発公団
愛知県 海部土地改良区



領内川改修前 領内川改修後

高熊八幡社の輪くぐり

- 7月第3日曜日 -

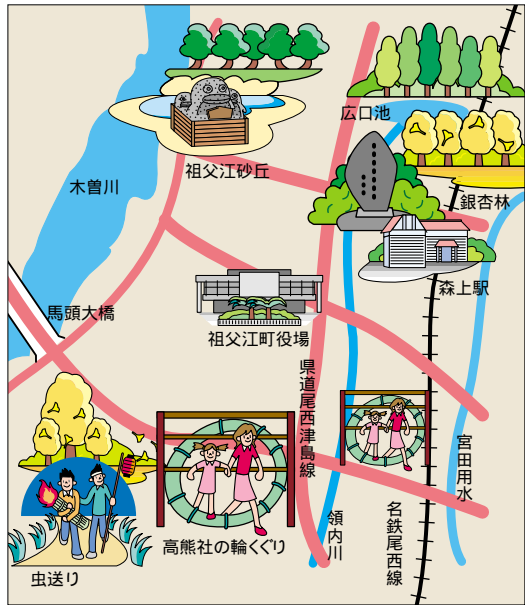
夏本番を迎え、無病息災・悪疫払いを願って行われる伝統行事。笛や太鼓のお囃子の中、参詣者は大きな茅の輪をくぐって身の汚れを被います。茅の輪は、悪疫にかからぬと古くから伝えられている「ガマの穂」で作られたもの。かつてはその後玉串を捧げた参詣者は頭に肉肉印をいただき、玉串は領内川へ放流されていました。



高熊八幡社の輪くぐり

祖父江町 EVENT INFORMATION

ファミリーウォーク	4月中旬
虫送り	7月10日
高熊八幡社の輪くぐり	7月第3日曜
布智神社の輪くぐり	7月第4日曜
郷土民謡盆おどり	8月15日
産業まつり	10月上旬
体育祭	10月上旬
サンドフェスタ	10月上旬



気ままにJOURNEY

祖父江の町にはもう一つ、夏を彩る風物詩が町民の手で残されています。虫送り。このお祭りは、稲を食い荒らす害虫を田から追い出し豊作を祈るもの。昔は全国各地で見られましたが、今では稀少な存在です。

「虫送り」地方によっては「美盛祭」と呼ばれることも。そのいわれは約八〇〇年前の昔のこと。平氏に占拠された美盛別荘美盛郷（今、うづうまねもり）が、不覚にも稲の切り株に「虫送り」を討たれてしまい、その恨みが「ナ」などの害虫になつて稲を食い荒らすようになったのだとか。そこで美盛の霊を供養し、荒れた田を取り戻すために始まった。虫送りの始まりは、この恨み語り継がれる



夏の風物詩「虫送り」

豊穣を願う虫送り

毎年七月二〇日の日暮れ時、町民たちは武將と馬をまわらせた型で「実盛人形」と高張り提灯を先頭に、たいまつ行列で神明社へ。鐘や太鼓で先導し、虫を追い払う仕事をしながら田を練り歩いた後、豊作を願って実盛人形を火の中に投げ入れられます。もちろんこの行事で虫達は殺されるわけではありません。川に流したり、村はずれに追いやったりと重に送り出されています。

節目節目の行事で生活にメリハリをつけ、のびやかに暮らしていた人々。虫送りは、そんな心の豊かさを今に伝えるものとして、愛知県の無形民俗文化財にも指定されています。

「虫送りの思い出美らすギンナン」について、無事に実りが訪れると、祖父江の町は黄金色に色づきはじめます。

「イチョウ」。その昔、凶作時の備蓄食料としても活躍してきたイチョウの木は、町民にとって大変親しみのある存在です。祐専寺イチョウや金兵衛イチョウ、栄信イチョウなどの名木をはじめ、樹齢一〇〇年を超える大木が一〇〇〇本以上も点在し、晩秋の祖父江を美しく染め上げます。



銀杏こんにやく

ギンナン

そのほとんどは雌株。イチョウは周囲数キロメートルに一本の雄株で実を結ぶといわれるため、祖父江町には数えるほどしか雄株がないのだそうです。そのため当然、ギンナンの生産高も日本一。日本の食卓に並びギンナンの約二割が祖父江産といえますから、その数は推して知るべきです。

最近ではギンナンを使った土産品も好評。銀杏こんにやくに銀杏饅頭、銀杏懐石など祖父江ならではの味が次々と登場しています。ギンナンは、とても身近な食べ物。僕らも昔から腹が減っては腹が減ったのは、ギンナン料理の開発に携わってこられた料理人、安田均（ひょうたん）町おじいちゃん、ギンナンを使った土産品づくりを始め、たのは昭和六〇年。地元飲食旅館組合から有志を募り、実に四



「料亭ひやす」のご主人安田均さん

「素材、まずギンナンの素質を知るのに時間がかかりました。最初は失敗ばかりでね...」。そんな不屈の料理人、安田さんがそうと教えてくださった究極のギンナン料理は、茶封筒でチン。割目を付けた殻付きギンナンを茶封筒に入れ、電子レンジで温めただけでほろりとおいしい。おままギンナンができるのだそう。手間のかかる「ト」は、味付けも一切不要なお手軽メニューです。

昔の祖父江はほとんどの家庭にも蓄えてあったギンナン。今では少しずつ親しみも薄れてきていると、安田さんは言います。故郷への思いを、かみしめながら、日夜新作の研究に余念がありません。

「ギンナンは、食材との相性次第では固くならぬ。へられなくなることもある難しい素材、まずギンナンの素質を知るのに時間がかかりました。最初は失敗ばかりでね...」。そんな不屈の料理人、安田さんがそうと教えてくださった究極のギンナン料理は、茶封筒でチン。割目を付けた殻付きギンナンを茶封筒に入れ、電子レンジで温めただけでほろりとおいしい。おままギンナンができるのだそう。手間のかかる「ト」は、味付けも一切不要なお手軽メニューです。

人と光と風の町、祖父江。

砂丘をわたる風は日毎にやわらかさを増し、ウインドサーフィンが、

川面を賑やかに彩りはじめ。街並を走る用水は、穏やかな表情をたたえ...。蘇水の郷・祖父江の町に、

名鉄新一宮駅より尾西線まで約15分、名鉄森上駅のごんまりとした駅舎に降り立ち、時の流れは次第に緩やかさを増していきます。昔ながらの細い路地、穏やかな水面をたたえる水路。そこに広がる由木畑...。春の陽光を受け、しそつ優しい行まいを見せる街並みをおんびりと辿りながら、祖父江に暮らす人々の表情を旅してみました。

リバーサイド今昔物語

木曾川左岸に広がる祖父江町は、日本でも有数のスーパの河岸砂丘を誇る町。それを囲むように樹齢一〇〇年以上の松林も生い茂り、独特の景観を形作っています。

この一帯は昔から、対岸の岐阜県と祖父江町を結ぶ渡し船が運行していたこと。その歴史は江戸時代中期にさかのぼります。当時すでに川湊として栄えていたこの一帯は、木曾川を上する定期船、通称「たの舟」の立寄地でした。そこに加えて、西岸の大須渡船（長良川）とも連携し、美濃国と尾張国を結ぶ「よ舟」の主要路線にもなっていました。往来も次第に激しさを増し、人馬のみならず大八車や人力車までが行き交う賑わいをみせました。ち

夜空を彩る 祖父江花火

そんな春の足音が聞こえる頃、祖父江町北部の山崎地区では、一足早く夏の風物詩「打ち上げ花火の製造」が始まります。

「高木煙火製造所」は西尾張地区で唯一、打ち上げ花火を製造している花火店。明治三四年の創業から現在に至るまで、伝統の製法を守りながら、職人の手で一つ一つ花火玉を作り上げています。

四代目を継ぐ高木善雄さんが、こんなお話をしてくれました。

「もともと花火は祖父江にあ



四代目・高木善雄さん

そんな春の足音が聞こえる頃、祖父江町北部の山崎地区では、一足早く夏の風物詩「打ち上げ花火の製造」が始まります。

そのせいでしょか、祖父江町のイベントには、花火が欠かせない存在。打ち上げ花火だけでなく、昼花火に手筒花火と、バラエティも豊かです。その仕掛人はもちろん高木さん。しかしそこには、常に危険と隣り合わせの緊張感に加え、一つでも新作を加えて観客を喜ばせなければ...といふプレッシャーも重く肩にのしかかります。

「えらい仕事です。でも、花火が上がったときの歓声や拍手を聞くといま来た年も...と頑張ってます」(笑)

そんな高木さんの言葉に、花火師の心意気を感じずにはいられません。



祖父江砂丘

なみに、対岸美濃側からは丸かきを荷運した行商が多くやってきたとか。威勢のいい売り込みの声に、渡船場はさぞ賑わったことでしょう。

昭和五二年、馬飼大橋が架橋され、同年に渡船場、八幡の渡しとも廃止。三〇年以上に渡って愛され続けた祖父江の歴史が、一つ幕を閉じたのでした。

現在の祖父江砂丘は、レジャーの拠点として新しい視線を集めています。国営木曾三川公園の中央水郷地区として整備が進み、ワイルドネイチャーフラサにリニューアル。趣向を凝らした砂のオブジェが並ぶ、サンド・フェスタが毎秋開催されるほか、釣り、テニャン、フットサル...。思い出の休日を通じ、人々の姿が、河岸を印象的に彩ります。

そして季節は春。川面を渡る風は日毎に暖かさを増し、芽吹きの歓びが砂丘をつつみこみます。砂丘を歩くウインドサーファーの足どりも、やさしい陽射しの中で、心なしかはずんで映るでしょう。



花火玉

手筒花火

特集 伊勢湾台風 第六編

濃尾平野の地盤沈下と 木曾三川高潮対策事業

壊滅的な打撃を与えた伊勢湾台風。その被害の復旧事業により、昭和三十七年、木曾三川高潮堤防が完成。しかし、昭和四〇年代の高度経済成長の下で、地下水揚水に起因する地盤沈下の進行に伴って、高潮堤防は大きく沈下し、その機能も低下。このため、昭和四四年より高潮堤防補強工事を、昭和五〇年より、高潮緊急堤防高上事業を開始し、昭和六三年に完成。現在は、本格的な高潮堤防補強工事を実施しています。

濃尾平野は、木曾三川と庄内川の流域山地から運びこまれた土砂が沈殿して形成された沖積平野です。その地形は愛知県大山市の標高五〇mから西南に向かって順次低くなり、最低は〇m以下となっています。

この平野の地形は、扇状地、自然堤防、河岸砂丘、三角州、干拓地区に区別されます。扇状地は、木曾川では大山を頂点として半径約一

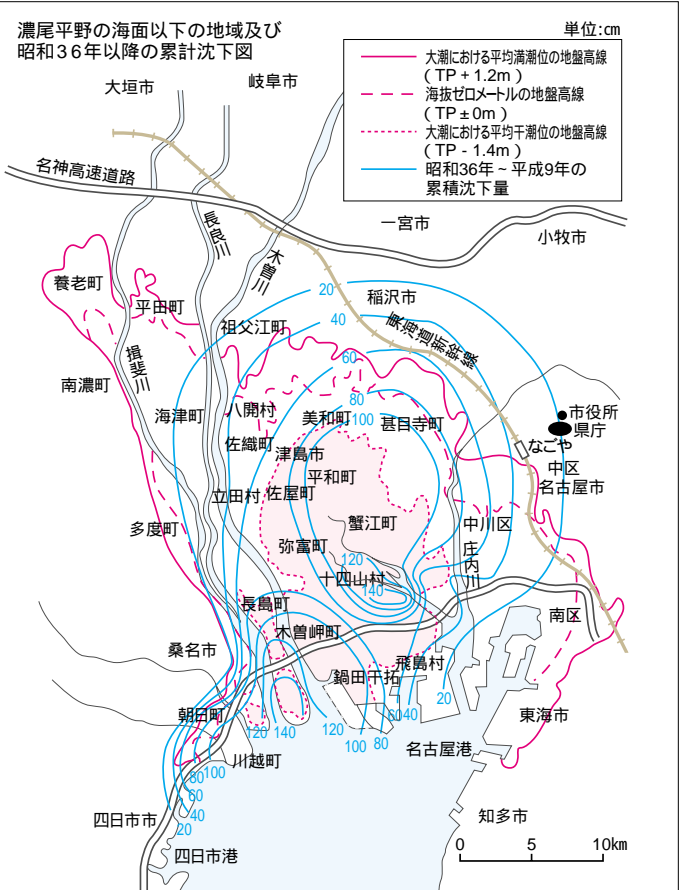
二km、面積約一〇〇km²に達するもので、このほか、揖斐川とその支流根尾川、粕川などに発達した扇状地がみられます。

自然堤防は、扇状地の末端から三角州の間に伸びる河沿いに土砂が堆積した微高地です。木曾川左岸側では、一宮、萩原、津島にいたる巡見街道筋にあるものと、起、祖父江、津島にいたる領内川筋にあるもの、及び南千秋、国府宮、清洲を経て西枇杷島にあるものなどが、かつての木曾川河道に沿ったものが明らかにされています。

三角州は、河口に土砂が堆積し、陸化した地域で、近世になると、洲の周囲に堤防をめぐらして輪中を築き、不安定な稲作農業地帯を形成していききました。干拓地は、一七世紀以降、三角州に続く海面を新田開発を目的に干陸され広大な地域が存在しています。沖積層で形成された濃尾平野は良質な地下水に恵まれたところ。いたるところで地下水が湧き出していました。こうした地下水の利用は、古墳時代前期頃からすでに行われており、木曾川町の玉井冷泉などをはじめ、各地に井戸の遺構は残されています。水田開発と水の確保、これは農業を主力産業とする江戸時代までの日本の重要な課題でした。時代が進むにつれ、井戸やため池、大規模な用水の整備など、利水の方法も徐々に高度化し、地下水の汲み上げも盛んに行われるようになりました。

濃尾平野の地盤沈下は古墳時代から見受けられますが、その当時の沈下は年間一mm程度の。その後の記録として明らかなのは濃尾大地震（一七〇七）や東南海地震（一九四四～四五）などによるものがあります。

高度経済成長計画を政府が発表したのは伊勢湾台風の際、昭和三五年のことですが、すでにわが国の経済は昭和三〇年代から著しい



地盤沈下の状況

地下水位の低下は、次のような過程を経て地盤沈下を発生させることとなりました。地下水を含む砂礫層は、粘土層にサンドリ手状にはさまれています。ところが、地下水を汲み上げすぎると、砂礫層内の水圧が低下して、粘土層から絞り出されるように供給され、粘土層は失った水の分だけ、体積が減って縮むこととなります。この現象は圧密と呼ばれ、一度

地盤沈下のメカニズム

地下水位の低下は、次のような過程を経て地盤沈下を発生させることとなりました。地下水を含む砂礫層は、粘土層にサンドリ手状にはさまれています。ところが、地下水を汲み上げすぎると、砂礫層内の水圧が低下して、粘土層から絞り出されるように供給され、粘土層は失った水の分だけ、体積が減って縮むこととなります。この現象は圧密と呼ばれ、一度

起こった圧密は元に戻らないため、粘土層の縮みが地盤沈下として表れます。地下水位の低下による地盤沈下は、地域によって格差がありますが、特に著しいのは濃尾平野南部の木曾三川下流域です。昭和三六年～六三年までの累積沈下量は図に示すとおりで、伊勢湾台風時に約一八五mmであった河口地帯の面積が昭和六三年には約二七四mmに拡大しています。

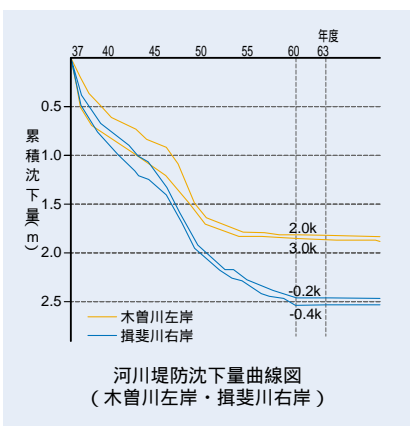
こうした下流域各地で、建物や井戸水の抜け上がりなど、地盤沈下の諸現象が目に見えて現れる中、昭和四六年、国、県、市町村などの関係各機関、及び学識経験者による『東海三県地盤沈下調査会』が発足、地盤沈下を防ぐための調査・研究が開始されました。さまざまな対策が実施されたため、地盤沈下量は昭和六三年頃には年間一～二cmと減少し、現在では一cm以下と沈静化の傾向を示しています。

高潮堤防補強計画の概要

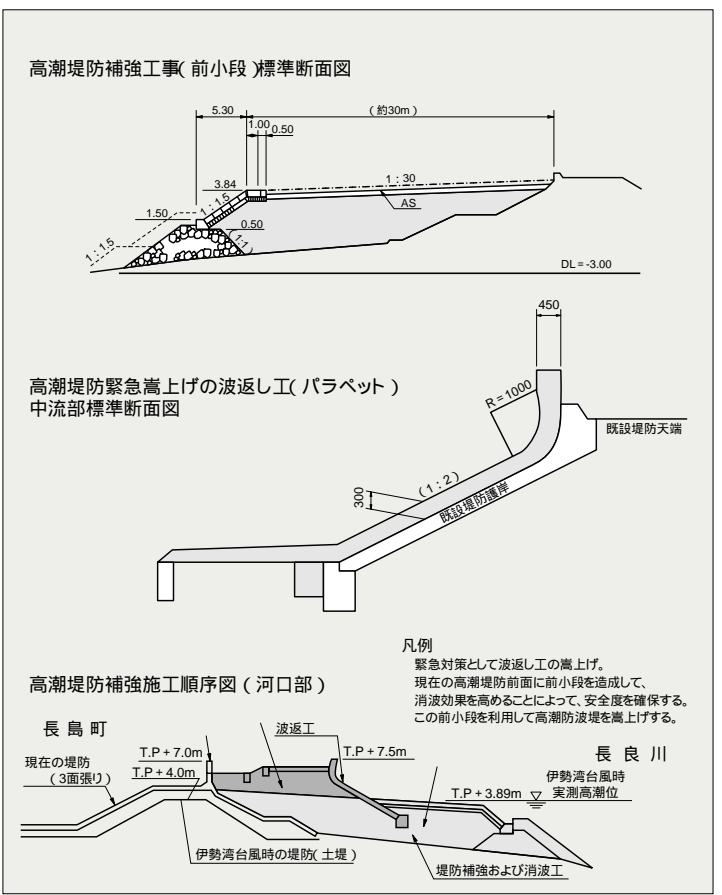
昭和三十七年、伊勢湾台風復旧事業として完成した木曾三川高潮堤防も、地盤沈下の進行に伴って大きく沈下し、堤防の治水機能が著しく低下しました。

昭和四四年当時は、昭和三十七年完成の高潮堤防が最大1.8m、平均1.0m沈下しており、その時点においても鎮静化することなく進行していました。その安全度を回復させるため、全高潮区間を対象に補強計画が策定されました。

歴史ドキュメント



高潮堤防の補強は、昭和四四年から前小段を中心に実施。しかし、その後の沈下は予想以上に大きく、計画水位よりも堤防が低い区間ができた。その区間は拡大し、約一〇mの地盤沈下があったところからみて、その後一〇年間で、大部分の高潮堤防が計画水位より低くなり、伊勢湾台風被災前の堤防と同程度か、それよりも低くなることを予想されました。こうした状況のなか昭和四九年度までに、



（一）高潮堤防の前面に前小段を造成して消波効果を高め、昭和三十七年程度の治水機能を回復する。 （二）さらに堤防沈下が進み治水機能が低下した場、その対策としては、前小段を利用して高潮堤防を嵩上げる。 高潮堤防緊急高上げ事業計画 高潮堤防の補強は、昭和四四年から前小段を中心に実施。しかし、その後の沈下は予想以上に大きく、計画水位よりも堤防が低い区間ができた。その区間は拡大し、約一〇mの地盤沈下があったところからみて、その後一〇年間で、大部分の高潮堤防が計画水位より低くなり、伊勢湾台風被災前の堤防と同程度か、それよりも低くなることを予想されました。こうした状況のなか昭和四九年度までに、



パラペット緊急高上げ工事

竣工していた前小段は、52kmで、このような進捗では、全区間を完成させるには今後二〇年以上を必要とすることが予想されました。したがって木曾川高潮堤防は、全区間において前小段の消波機能が發揮されないまま、高潮災害を受ける危険がきわめて大きいことが懸念されました。このため、本来の改修計画、前小段造成に続いて高潮堤防高上げ工事を実施することが最良であるものの、堤防の沈下が鎮静化する傾向になり、高潮堤防の進捗状況を考え、緊急対策として波返し工（パラペッ



揖斐川左岸高潮堤（前小段造成）

- 参考文献 『木曾三川治水百年の歩み』 建設省中部地方建設局 『次代にひきつぐあの教訓伊勢湾台風』 伊勢湾台風30周年事業実行委員会 『高潮堤防緊急高上工事誌』 建設省木曾川下流工事事務所 『高潮堤防緊急高上工事誌』 建設省中部地方建設局 『濃尾平野の利水概史』 中部地方建設局河川部河川課 『木曾川水系農業利水誌』(社)農業土木会

「危険が迫っている」情報をいかに伝えたか

防災最前線——名古屋地方気象台の奮闘



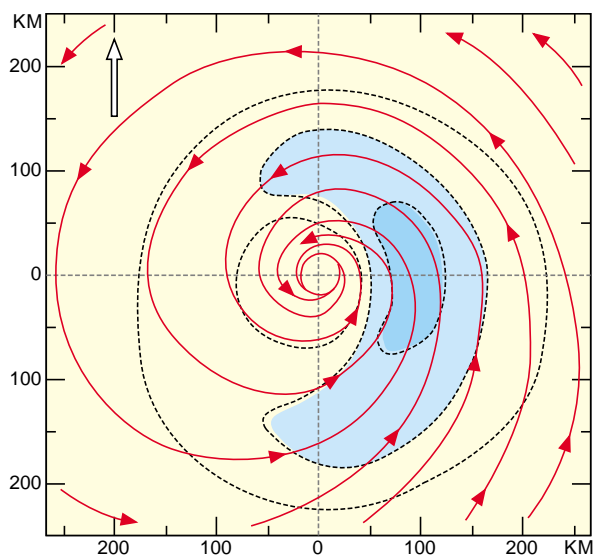
坂上 公平氏

昭和24年 石川県輪島市生まれ
東京・金沢・津の各地地方気象台を経て、
現在 名古屋地方気象台予報課気象情報官
昭和54年 大雪のメカニズムの研究で
日本気象学会奨励賞受賞

はじめに
あの伊勢湾台風を再び経験していないと保証はできない。そして必要以上に台風を恐れることもない。高度情報化社会では、台風と上手につき合い私たちの防災対策を講ずることが重要です。気象台が発表する最新の台風情報を手直し、台風に備えてください。

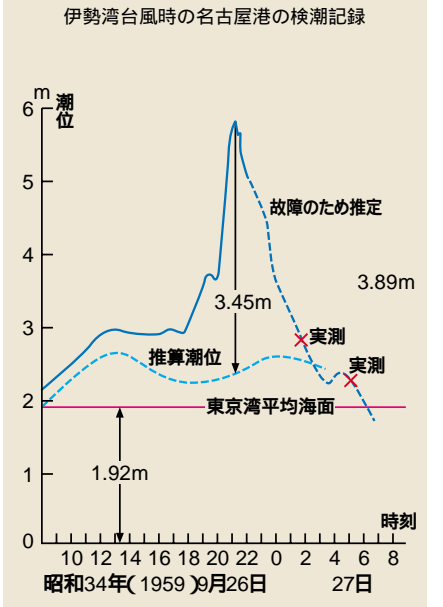
台風の初歩的な知識

北西太平洋や南シナ海で発生する熱帯低気圧のうち、中心付近の最大風速が17m/s以上のものを「台風」と呼んでいます。台風は海面水温が約26℃以上の熱帯海域で発生・発達します。そこでは積乱雲が群をなし、このうちのあるものがうまく渦を巻きはじめ、発達したものが台風です。台風の眼は最大風速が20m/sを越えるころ形成され、大きな眼は直径約150



地表付近における台風周辺の流線(実線)と風速分布(破線)の特徴(青色部は風が特に強い領域)
「台風の科学」大西晴夫

kmにもなりません。眼のまわりには高さ10km以上の積乱雲が壁のように取り巻き、そこは猛烈な雨が降っています。台風の風は反時計まわりに吹き込み、ふうふうは進行方向に向かって、右側の方で強くなっています。したがって、台風が伊勢湾のすぐ西を北上する場合、気圧の低下と湾の奥に向かって吹く風により、著しい高潮が発生する恐れがあります。台風は上空の風に乗って移動します。夏から秋は太平洋高気圧の縁に沿



伊勢湾台風時の名古屋港の検潮記録

1) 急速に発達

伊勢湾台風(台風第15号)は、昭和34年9月21日21時マリアナ諸島で発生しています。米軍気象観測機によって23日15時に中心の最低気圧が84hPaと確認され、急速に猛烈な台風に発達しました。22日9時から23日9時の24時間に91hPaも中心気圧が低くなっていきます。これは昭和28年に三河湾を襲った台風第13号による98hPaに次ぐ史上2番目の急速に発達した台風です。

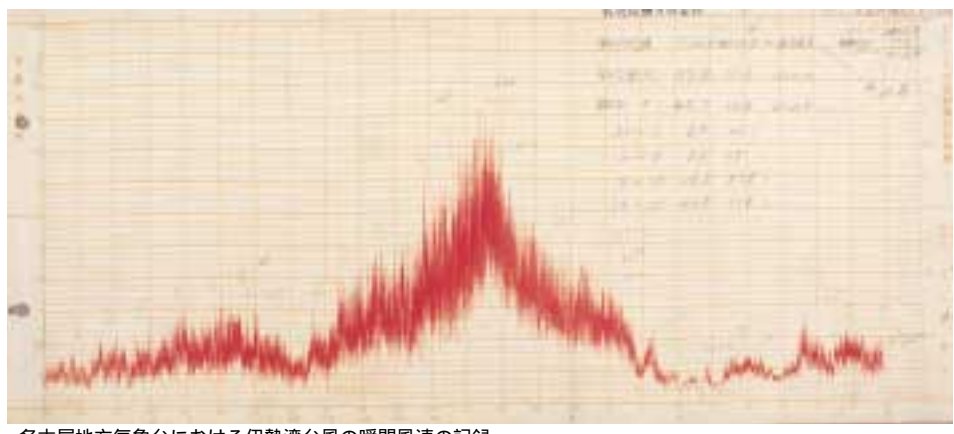
気象学的にみた伊勢湾台風の特徴

- 2) 巻きすに北上
台風は最低気圧を観測してからわずか3日後に上陸しています。大きな暴風域(風速25m/s以上の範囲)強い勢力を保ったまま北上を続け26日18時すぎ潮岬のすぐ西に上陸しました。このとき潮岬測候所では、18時13分に最低気圧82hPaを観測しています。この記録は室戸気圧81.6hPa、枕崎台風82.0hPaに次いで3番目に低い値です。
- 3) 伊勢湾沿岸の異常な高潮
伊勢湾台風の高潮は、台風が伊勢湾沿岸にとどめ最悪のコースを通過したため、名古屋港で3.89m(東京湾平均海面上)と記録的に高くなり、名古屋港の既往最高潮位2.97mを0.92mも越える高さとなっています。

TALK & TALK

伊勢湾台風予報作業日誌

昭和34年9月26日は慌ただしく明けた。すでに前日の9月25日夕刻に台風情報第1号を公表。ついで26日午前6時に第2号を公表。気象台は26日早朝から総動員の非常警戒体制に入った。その日は土曜日で、そのため、午前中に警報を発表しないと市町村への伝達に支障が生じるという配慮から、午前10時には関係官公庁・報道関係者を集めて説明会を開催した。台風は名古屋の西側をすれすれに通る最悪のコースになると、その規模は過去の記

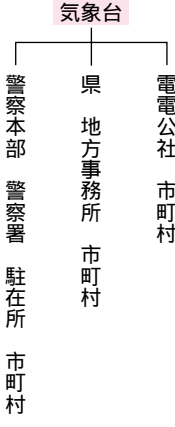


名古屋地方気象台における伊勢湾台風の瞬間風速の記録



雨漏りがはげしく、傘をさして頑張る名古屋地方気象台職員(毎日新聞社提供)

録を越えることを説明し、厳重な警戒体制をとることを訴えた。ついで午前11時15分、暴風雨・高潮・波浪の各警報を発表。これらの情報は気象台から複数のルートを使って、各市町村へ伝えられた。



一般市民には50番今日の電話(7番)で知らせた。昼過ぎから報道関係者が詰めかけ、NHKとCBCは作業室にマイクを設置し放送を開始した。午後2時ごろからそれまで青空がみえた空は険悪となり、同30分に台風情報第4号を発表。勢力は台風第13号に勝ると再度警告した。台風が間近に迫った午後6時10分に気象台は停電、直ぐ自家発電に切り替えた。台風は午後6時すぎ潮岬の西方15km付近に上陸した。同6時半に台風情報第6号を発表。予報課長がラジオの生放送で、夜10時ごろに名古屋を通過し最悪のコースを通るため大災害の恐れがある。伊勢湾は2mの高潮が予想されるため、海岸地方では万全な対策



伊勢湾台風当時の名古屋地方気象台(当時職員の山下秀司氏提供)

を」と情報を流していた。気象専用線は、午後6時30分より東京を除き故障が続き、一般加入電話も台風が最も迫った午後9時50分ころ完全に断線した。辛うじて通じていた報道関係の専用線を使って台風情報を伝えた。名古屋港分室とは、午後8時に潮位偏差1.6m(気象潮)の連絡を最後に途絶えたため、海上の様子が見えなくなった。

木造二階建の八角形の現業庁舎は、午後8時頃から隙間より雨水が侵入してきた。職員たちは心算処置に懸命だった。気圧はぐんぐん下がり、風はますます狂ったように見える。午後9時25分に最大瞬間風速45.7m/s、27分に最低気圧95.8hPaの歴代第1位を観測した。30分に情報第9号を発表。一刻も早く伝えようとして予報係員の心があせり、40分に予報作業室の屋根が飛び、一大音響にて各所の壁が落ち、もともと白煙が立ち、台風命令で全員避難した。午後10時、気圧が上がりはじめ、30分に風速もわずかに弱まってきた。台風七つや八つを越した。また吹き返しの風は強いが職員たちには安堵の色が浮かんだ。街は真っ暗だった。

警報を活用した例

知多半島や三河湾沿岸の大部分の市町村では、昭和28年の台風第13号の教訓を活かし、午前11時半ごろ警報を受け直ちに消防団を召集して警戒しています。碧南市では碧南干拓地の103戸、455人に避難命令をだした15時に完了しています。このため高潮による犠牲者はありませんでした。これに反し事前に避難が行われなかった干拓地では多くの犠牲者を出しました。

国鉄では運転を休止し、客車は安全な所に、臨港駅の貨車は高潮の心配ない所に退避させて警戒したため、旅客に1人の犠牲者も出ませんでした。中部電力名古屋火力発電所は高潮のため水に浸かったが、発電機は全部事前に吊り上げて置いたため、28日から送電を開始しています。日本硝子四日市工場は大坂での高潮の教訓を活かし日頃から高潮の備えができていたから、従業員の素早い復旧活動により台風通過後の3日目から操業を開始しています。このように警報の活用がいかに大切か、明暗がはつきりと現れたことも伊勢湾台風の特徴です。

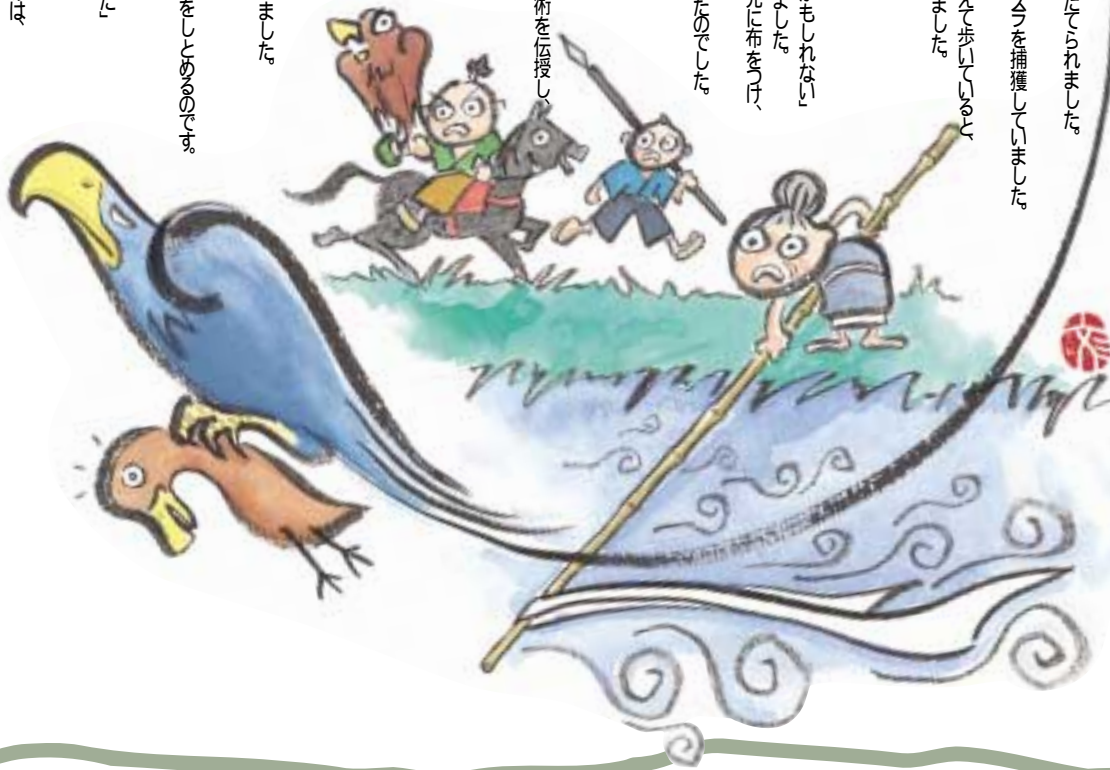
参考・引用文献

- 東海気象同好会 1959.9. 雲 伊勢湾台風特集 気象庁
- 1961. 気象庁技術報告第7号
- 伊勢湾台風調査報告
- 名古屋地方気象台 1990. 創立百年誌
- 藤崎康夫 1995. 伊勢湾台風と闘った人びと 9月の折り

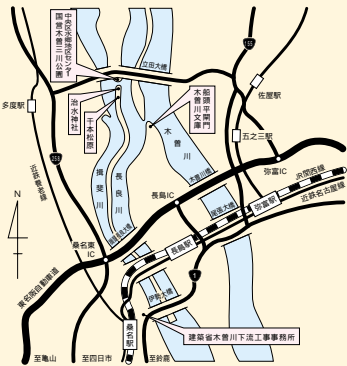
民話の小箱

祖父江の竿鷹
さおたか

横井作左衛門時久は、祖父江横井家の祖
大阪の陣で勇敢に戦い、その武功により尾張藩士にとりたてられました。
血気盛んな作左衛門は、大の狩猟好き。
若く頃から馬を走らせ、鷹を飛ばしにすえて、カマやウツフを捕獲していました。
元和三年（一六一七）初冬、
いもがまに古田屋城の西方、江川のほとりを鷹をすえ歩いてゐると、
老婆が、竿の先に布をつけ、川をさしてゐるのを見かけました。
そんな時のこと。
老婆の竿に驚いた水辺のカマが飛び立って、
「どいかにとまなく集が舞い降りてきやう。」
カマをさく捕らえて、飛びまわしてゐます。
「かまらなことが、あるもか。これは狩猟に役に立つのかもしれない」と
考えた作左衛門は、早速、集を捕らえ、ならしはじめました。
ちやうど、一年が過ぎた頃、老婆のまづに竿の先に布をつけ、
「それゆけ、集を放すがはやいか、」
集は飛び立って同時に舞い降りて、水辺のカマをつかまえたのでした。
「作左衛門、おもしろい放鷹をするぞうだのう。見せよ。」
尾張の初代藩主義直に命じられた作左衛門は、
御前にて新式放鷹術を披露。
「おもしろい。今日からそなたを鷹匠頭にしてやう。」
と命じました。と、いふのが作左衛門は、
「お待ちください。わたたくしはまはまはまも老体。息子にこの術を伝授し、
完成したところで、お申上げたくのでした。」
と、辞退してしまつたのでした。
放鷹といふ遊びが尾張に流行してはじめてのは、
延暦年間（七一八～八〇〇）のこと。
この遊びが徳川時代になると形式化され、
美しさ、勇壮さが尊ばれるやうになつてしまつた。
こうして時代があつて、
作左衛門は、誰にも教へるまいと思つた。
完成された型をへんたつて思ひました。
この布はわたたくし一年の歳月をかけ、美しい型になりました。
白口布を意味する三日月の竿の先つけ、
カマやウツフのひんがしめあたりはふりあつた、
羽をすばしめあつた舞に降りてきた集が、飛び立つたカマをさくものでした。
百発百中でした。
これに自信をかけた作左衛門は、
「わが子時有ではないです。竿鷹の術、すべて伝授しました。」
と藩主義直に息子を紹介。
時有は鷹匠頭となり、その職は世襲になりました。
ちなみに、尾張で放鷹が藩主の専売特許みだつたのは、
正保二年（一六四五）のこと。
以来、藩主から許可された者以外は、放鷹できなくなりました。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
 《入館料》無料
 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島ICから車で約30分
 東名阪長島ICから車で約10分
 《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・
 木曾川文庫
 〒496-0947 愛知県
 海部郡立田村福原
 TEL(0567)24-6233



編集後記

木曾川背割堤の水辺に羽を休めていたコハクチョウの群もいつの間にか飛び去り河岸には緑がもどって来ました。

船頭平閘門河川公園では恒例の桜祭りが3月28日～4月4日迄開催されます。

Vol.30の編集にあたって、祖父江町並びに名古屋地方気象台 坂上公平氏に大変お世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。

今回は愛知県海部郡八開村を特集します。ご期待ください。

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

表紙写真
 左上：祖父江町特産のギンナンの実
 左中：木曾川にてウインドサーフィン
 左下：祖父江砂丘サンドフェスタ 右：木曾川と馬飼大橋